

『順中論義入大般若波羅蜜經初品法門』の 解読研究

小 川 一 乗

大学院博士後期課程の仏教学特殊研究Ⅲ（演習）において、無着の『順中論』の解読研究を始めて久しい。『順中論』は漢訳としてのみ現存し、しかも、極めて難解な漢訳であることは、研究者の間で周知されている。そのためか、瑜伽行唯識派の無着による龍樹の主著『根本中論偈』に対する注釈書（内容は帰敬偈に対する解釈）として、重要な文献とされているが、未だに全文の解読研究は成し遂げられていない。

最初は素読と読み下しを試みた。次にそれを日本語に翻訳することにしたが、解読研究による現代語訳は遅々として進まず、今年で三年目に入った。演習という授業形態は、授業担当者主導の授業というよりも、学生自身による解読研究を主とした授業である。ここに、学生諸君の研究成果の一端を「研究ノート」として公表することにした。

1 順中論義入大般若波羅蜜經初品法門翻譯之記

諸國語言。中天音正。彼言那伽夷離淳那。此云龍勝。名味皆足。上世德人。言龍樹者。片合一廂。未是全當。

諸國の語言あれど、中天の音に正すに、彼那伽夷離淳那と言う。此れ龍勝と云はば、名の味皆足れり。上世の徳人、龍樹と言うは、片もて一廂に合す。未だ是れ全きに當らず。

諸国の言葉で「呼ばれるが」、中部インドの発音で正しく発音すれば、“ナーガールジュナ (Nāgārjuna ca. 150-250)” と言う。これを“龍勝” と言うなら、名前のもつ意味は十分表現しえていることになる。「一方、」 古来より高德の人たちが言い慣わしてきた“龍樹” という名称は「龍という」片方の意味は満たすが、全体の意味を満たしているのではない。^①

① “Nāgārjuna” の名前の由来については『龍樹菩薩伝』(鳩摩羅什訳 ChT50 184a-186c) 及びプトゥンの『仏教史』から知ることができる。(Obermiller, E., ed., *History of Buddhism (Chos-'byung) by Bu-ston*, I. Part, The Jewelry of Scripture, Heidelberg, 1931.; II. Part, The History of Buddhism in India and Tibet, Heidelberg, 1932. [p. 148]) 『龍樹菩薩伝』によると、ナーガールジュナの母親は“アルジュナ” という樹木の下で彼を産んだことから“アルジュナ” と名づけ、龍が彼の仏道を完成させたという意味で“ナーガ” というのだと説明する。一方、プトゥンは異なった説明をする。まず、“ナーガ” と称したことについて以下の四つの理由をあげる。あたかも龍が海から生まれるように真理の法界から生まれたこと。あたかも龍がおのれの住処について限界を知らないように、常住・断滅という見解の極端を住処としないこと。あたかも龍が黄金や宝石の富を持つように聖典という宝庫を持っていること。龍のように洞察力のある眼を持っていること。次に、“アルジュナ” については、法の守護者・統治者であり、この世の敵であるあらゆる罪惡の力の征服者である、という意味で“力を得た者” の意味だという。「順中論翻譯之記」が“龍樹” という呼び名を不十分とし、樹を“勝” としたのは、このプトゥンの説明に従えば、罪惡を征服し、法の守護者・統治者の意味で“力を持ち勝れている” ことを示していることになる。

龍勝菩薩通法之師。依大般若。而造中論衆典。於義包而不悉。大乘論師。名阿僧佉。解未解處。別爲此部。魏尙書令儀同高公延國上賓瞿曇流支。在第供養。正通佛法。對釋曇林。出斯義論。武定元年歲次癸亥八月十日揮辭丙寅凡有一萬三千七百二十七字

龍勝菩薩，通法の師なり。『大般若』に依りて、而して中論たる衆典を造せり。義を包むも而も悉さず。大乘の論師，阿僧佉と名づくは、未だ解せざる處を解し、別して此の部を爲せり。魏の尙書令・儀同，高公，上賓として瞿曇流支を國に延き，第に在りて供養す。正しく佛法に通ぜり。釋曇林に對して，斯の義論を出す。武定元年歲次癸亥八月十日，揮辭丙寅。凡そ一萬三千七百二十七字有り。

② 宋・元・明・宮内省本に従い訂正した。

龍勝菩薩は仏法に精通する師であり、『大般若波羅蜜經』^③に基づいて“中論”という多くの典籍を著した。〔しかし、それら諸々の中論は『大般若波羅蜜經』の〕意趣を内包してはいるが、完全に明らかにされていない。そこで、大乘の論師アサンガ(Asaṅga ca. 395-470)は、『大般若波羅蜜經』の未だ解明されていないところを解明し、あらためてこの論を著したのである。魏の尚書令・儀同であった高澄(A. D. 521-549)^④は、ガウタマ・プラジュニャー・ルチ(Gautama-prajñā-ruci 6c)^⑤を上賓として国に招いて宮殿でもてなした。ガウタマ・プラジュニャー・ルチは、仏法に精通していた。〔筆受者〕釈曇林(6c)^⑥に向かってその意義を論じた。〔訳出開始は〕武帝元年、癸亥(A. D. 543)、8月10日。訳出終了は丙寅(A. D. 546)。〔本論は〕約13727文字である。

③ 『順中論』で扱われるのは大品系般若經と考えられている。補注参照。

④ 尚書令とは、中央官庁であった尚書の長官。尚書とは、もともと天子直属の秘書官であった。漢代においてはまだ黒幕的存在であったが、後漢の光武帝以降徐々に権力を掌握するようになったとされている。それが魏の官品制度では第三品となり政治の表舞台に登場することになった。儀同(開府儀同三司)とは地位をあらわす名称。“儀、三司に同じ”と読み、儀礼の時同じ位の席につくことを意味する。〔宮崎1992〕

さて、〔諏訪1988〕(pp. 216-217)は、『北齊書』・『北史』の記述を手がかりに『第一義法勝翻訳之記』に記載される“尚書令儀同高公”を高歡の子、高澄と同定している。

⑤ ガウタマ・プラジュニャー・ルチ(般若流支)は文献史上翻訳者として名を残すのみでその他詳細は不明。〔八力1979〕は、訳経史上、菩提流支と般若流支との間に混乱があることに触れた上で、『順中論』訳出の年代と時代的に近い『法経録』の記述、そして『順中論』に引用される『勝思惟梵天所問經』の一節と菩提流支訳の当該箇所との一致とを最大の根拠に、『順中論』の翻訳者を般若流支ではなく菩提流支と断定している。一方、〔諏訪1988〕は、『開元釈教録』(ChT55 542c-543a)の記述通り般若流支訳と見なす。よって、バラモン。魏においては“智希”と呼ばれたこと。中部インドのヴァラナシ(中印度波羅捺城)から来て、孝明帝熙平元年(516)に洛陽に入り、その後、^{きょう}遷都と共に移り、孝靖帝元象年(538)から武帝元年(543)の間、鄴城内の金華寺や昌定寺そして尚書令・儀同であった高澄の廷内で翻訳に従事した人物と同定する。

⑥ 曇林という人物については、『統高僧伝』“慧可”の関連項目(ChT50 552b)に“林法師”という名で若干の記録があるが生没年代等詳細は不明。中国文献史上、筆受者として登場し、一方禪宗の開祖である菩提達磨の弟子として『菩提達磨略弁大乘入道四行』序文の執筆者としても登場する。また吉蔵の『勝鬘經宝窟』に曇林の『勝鬘經』の注釈が引用されることから、『統高僧伝』の「盛講勝鬘并制文義」という記述も裏付けられ、『勝鬘經』に精通していたことがわかる。

2 順中論義入大般若波羅蜜經初品法門卷上

龍勝菩薩造 無着菩薩釋
元魏婆羅門瞿曇般若流支譯

歸命一切智

不滅亦不生 不斷亦不常
不一不異義 不來亦不去
佛已說因緣 斷諸戲論法
故我稽首禮 說法師中勝

一切智に歸命す

滅せず亦た生ぜず 斷ならず亦
常ならず
一〔義〕ならず異義ならず 來
らず亦去らず
佛已に因緣を説きて 諸の戲論
の法を斷ず
故に我稽首して禮す 說法師中
勝なりと^⑦

⑦ 歸敬偈

[Poussin p. 11.13-16]

anirodham anutpādam anucchedam
aśāśvatam.

anekārtham anānārtham anāgamam
anirgamam.

yaḥ pratītyasamutpādaṃ prapañcopaśa-
maṃ śivam.

deśayām āsa sambuddhas taṃ vande
vadatām varam.

[Tib tsa 1b2-3]

gang gis rten cing 'brel par
'byung//gag pa med pa skye med pa//
chad pa med pa rtag med pa//ong ba
med pa 'gro med pa//

tha dad don min don gcig min// spros
pa nyer zhi zhi bstan pa//

rdzogs pa'i sangs rgyas smra rnam
kyi//dam pa de la phyag 'tshal lo//

一切智者に帰命いたします。

滅するのではなく、生ずるのではなく、断滅ではなく、常住でない、
同一でなく、別異でなく、来るのではなく、去るのではない、
そのような縁起をブツダは、すでに説き終えて、諸々の戯論の法を断ぜ
られている。
ですから、私は稽首して礼拝いたします、説法者の中で最も勝れたお方
として。

[青目 1b11-14]

不生亦不滅 不常亦不斷
不一亦不異 不來亦不出
能說是因緣 善滅諸戲論
我稽首禮佛 諸說中第一

[清辯 51c15-18]

不滅亦不起 不斷亦不常
非一非種種 不來亦不去
緣起戲論息 說者善滅故
禮彼婆伽婆 諸說中最上

[安慧 136a15, 136c3]

不滅亦不生 不斷亦不常等
我稽首禮佛 諸說中第一

如是論偈。是論根本。盡攝彼論。
我今更解。彼 [40a] 復有義。如是
如是。如彼義說。如是如是。斷諸衆
生喜樂取著如是如是。隨義造論。無
有次第。
問曰。汝說此論。義無次第。或有次
第。何意因緣。而說義論。如所依法。
如是造論。
答曰。此如是義。世尊已於大經中說
言。

是の如き論偈、是れ論の根本にし
て、盡く彼の論を攝す。我今更に解
す。彼に復た義有り。是の如し是の
如し。彼の義の如く説けり。是の如
し是の如し。諸の衆生の喜樂に取著
するを斷ず。是の如し是の如し。義
に隨いて論を造す。次第有ること無
し。

問うて曰く。「汝此の論を説くに、
義に次第無けんや、或は次第有らん
や。何れの意を因縁として、而も義
論を説くや。所依の法の如くに、是
の如く論を造せるや。」

答えて曰く。「此れ、是の如き義
なり。世尊、已に『大經』中に於て
説きて言う。

上述の偈頌（帰敬偈）が〔中〕論の根本であり、〔この偈頌は〕その論をことごとく包摂するものである。私は、今さらに解釈する。それ（『中論』）の有する意趣は全く帰敬偈の通りであり、その帰敬偈の意趣に従って『中論』が説かれるのである。また諸々の衆生の喜・楽に対する執着も、帰敬偈に従って断ぜられるのである。だから、その〔『中論』の帰敬偈の〕意味に従って論（『順中論』）を著すのであり、必ずしも〔『中論』の偈頌の〕順序に従うわけではない。

問。「汝がこの論（『順中論』）を説く上で、帰敬偈の意趣に根拠は有るのであろうか、あるいは無いのであろうか。いったいどういう理由で論を著すのか。依拠する〔『大般若波羅蜜經』の〕法と同様の根拠で、その論を著すのか。」

答。「それは次のような意味〔をもって説くので〕あり、〔そのことは〕世尊がすでに『大般若波羅蜜經』の中で説いておられる。

憍尸迦。於未來世。若善男子。
若善女人。隨自意解。爲他說此
般若波羅蜜。彼人唯說相似般若
波羅蜜。非說眞實般若波羅蜜。
帝釋王言。世尊。何者是實般若
波羅蜜。而言相似非實般若波羅
蜜。

佛言。憍尸迦。彼人當說色無常。
乃至說識無常。如是說苦無我不
寂靜空無相無願。如是乃至說一
切智。彼如是人。不知方便。有
所得故。如是應知。

帝釋王言。世尊。何者是實般若
波羅蜜。

佛言。憍尸迦。尚無有色。何處
當有常與無常。如是乃至無一切
智。何處復有常與無常。如是等
故。

「憍尸迦，未來世に於て，若し
は善男子若しは善女人，自らの
意に隨いて解し，他の爲に此の
般若波羅蜜を説くも，彼の人た
だ相似の般若波羅蜜を説くのみ。
眞實の般若波羅蜜を説くに非
ず。」

帝釋王^{もうさ}言く。「世尊，何者か
はれ實の般若波羅蜜なるや，而し
て相似にして非實の般若波羅蜜
と言うや。」

佛^{のたまわ}言く。「憍尸迦，彼の人，當
に色の無常なるを説くべし，乃
至，識の無常なるを説くべし。
是の如く，苦・無我・不寂靜，
空・無相・無願を説くべし。是
の如く，乃至，一切智を説くべ
し。彼の是の如き人，方便を知
らず。有^{うしよとく}所得なるが故なり。是
の如く應に知るべし。」

帝釋王^{もうさ}言く。「世尊，何者か
はれ實の般若波羅蜜なるや。」

佛^{のたまわ}言く。「憍尸迦，尚色有るこ
と無きに，何處にか當に常と無
常有るべけんや。是の如く，乃
至，一切智無きに，何處にか復
た常と無常有らんや。是の如き
等の故なり。」

「カウシカ (Kauśika) よ。未来世において善男子・善女人は自分の意に沿うように理解して、他の人に般若波羅蜜 (prajñāpāramitā) を説くが、その者はただ似て非なる般若波羅蜜を説くにすぎないのであって、真実の般若波羅蜜を説くことにはならない。」

帝釈王が申し上げた。「世尊よ、いったい何が真実の般若波羅蜜なのでしょう。また、何が似て非なるものであって、真実でない般若波羅蜜と言うのでしょうか。」

ブッダは仰せられた。「カウシカよ、その者は、当然のように色 (rūpa) から識 (vijñāna) [の五蘊] に至るまでの無常について説くであろう。同様に、[色から識に至るまでの] 苦・無我・不浄 (aśubha)^⑧ を説くであろう。同様に、空・無相・無願から一切智に至るまで [の無常・苦・無我・不浄] を説くであろう。しかしそのような者は、[般若波羅蜜の] 方便を知らない。なぜなら、法を捉えるからである。まさに、そのように知いなさい。」

帝釈王が申し上げた。「世尊よ、いったい何が真実の般若波羅蜜なのでしょう。」

ブッダは仰せられた。「カウシカよ、そもそも色は存在しないのに、いったいどこに [存在しない色の] 常と無常とが存在するであろうか。同様に、一切智^⑨に至るまで存在しないのに、また、いったいどこに [それらの] 常と無常とが存在するであろうか。以上の理由からである。」

⑧ 般若経の相当箇処により、不寂静から訂正。補注参照。

⑨ 「一切智」(sarvajña) について、漢訳では、「状態・境涯」の用法と意味、「知識内容」の意味も混在していることが [川崎1992] p. 23に指摘されている。般若経の相当箇処では順に「一切相智性」(sarvākārajñata)「一切智性」(sarvajñata)となっている。補注参照。

又言。

憍尸迦。若善男子。若善女人。
如是教他修行般若波羅蜜。而說
般若波羅蜜。作如是言。

善男子。來修行般若波羅蜜。汝
善男子。乃至無有少法可捨。汝
心勿於少法中住。何以故。如是
般若波羅蜜中。無有正法。若過
法者。是則無法。於何處住。
何以故。

憍尸迦。如一切法自體性空。若
其彼法自體空者。彼法無體。若
無體者。是名般若波羅蜜。若是
般若波羅蜜者。彼無少法可取可
捨。若生若滅。若斷若常。若一
義。若異義。若來若去。此是眞
實般若波羅蜜。

のたまわ
また言く。

「憍尸迦、若しは善男子、若し
は善女人、是の如く他に教え般
若波羅蜜を修行せしむ。而して
般若波羅蜜を説きて、是の如き
言を作す。「善男子、來りて般
若波羅蜜を修行せよ。」汝善男
子、乃至少法として取すべき有
ること無し、汝が心、少法中に
住すること勿れ。何を以ての故
に。是の如き般若波羅蜜中に、
正法有ること無し。若し法を過
れば是れ則ち無法なり。何處に
か住せん。

何を以ての故に。

憍尸迦、一切法の自體性として
空なる如く、若しそれ彼の法の
自體空なれば、彼の法無體なり。
若し無體なれば、是れ般若波羅
蜜と名づく。若し是れ般若波羅
蜜なれば、彼れ少法として取す
べき捨すべき、若しは生、若し
は滅、若しは斷、若しは常、若
しは一義、若しは異義、若しは
來、若しは去なし。此れは是れ
眞實の般若波羅蜜なり。」

⑩ 宋・元・明、三本に従い訂正した。

また「世尊は」仰せられた。

「カウシカよ、善男子・善女人は、その様に他の人々に般若波羅蜜を修行させるであろう。また般若波羅蜜を説いてこう述べるであろう。「来たれ、善男子よ、般若波羅蜜を修行せよ」と。しかし汝善男子よ、いかなる法をも捉えてはならない、いかなる法にも止ってはならない。それはどうしてか。そのような般若波羅蜜の中には、正しい法はないからである。もし法を誤解するならば、当然法は有り得ないであろう。〔よって〕いったいどこに止まろうか。それはどうしてか。

カウシカよ、すべての法の自体は、その本質が空である。それと同様に、もし法が空であるならば、その法の自性は存在しない。もし自性として存在しないならば、そのことを般若波羅蜜というのである。もしこれが般若波羅蜜ならば、捉えるべき、捨てるべき、或いは生ずる、滅する、断ずる、常である、同一である、別異である、来る、去る、いかなる法も存在しないのである。これが真実の般若波羅蜜である。^⑪

⑪ 『摩訶般若波羅蜜多經』(No. 223)「法施品」に相当。ChT8 295b7-296a25. [真野1983] 他；『大般若波羅蜜多經』第二会「經文品」に相当。ChT7 169a12-170b25.；『放光般若經』(No. 221)「功德品」に相当。ChT8 55b19-56a17.；チベット訳『二万五千頌般若經』北京版(No. 730)影印版 vol. 18 217a8-222a7 及び北京版(No. 5188)影印版 vol. 89 116a8-120b6. 詳細は補注を参照。

依彼因緣故造此論。我如是知般若波羅蜜。此方便故。我今解釋。所謂入中 [40b] 論門。彼善男子。善女人言。我知色無常。乃至識無常苦無我等。以此因緣故。是相似般若波羅蜜。非是眞實般若波羅蜜。

問曰。若說色空無相無願。云何此法唯是相似。非實般若波羅蜜耶。此三解脫世尊所說。非有爲故。云何彼空亦相似耶。

答曰。以取著故。

問曰。取著何法。

答曰。於色取著。於空取著。若有取著。云何得是般若波羅蜜。此取著者。豈非是見。一切諸見。皆因如來說空故斷。又復何人即見彼空。彼人復以何法對治。唯無二際。是則能除。無二際故。名爲非際。

彼の因緣に依るが故に此の論を造す。我是の如く般若波羅蜜を知る。此の方便の故なり。我今解釋す。所謂入中論門なり。彼の善男子善女人言く。「我色の無常、乃至識の無常・苦・無我等を知る。」此の因緣を以ての故に、是れ相似の般若波羅蜜なり。是れ眞實の般若波羅蜜に非ず。

問うて曰く。「若し色の空・無相・無願を説かば、云何が此の法唯是れ相似のみにして、實の般若波羅蜜に非ざる。此の三解脫は世尊の所說にして、有爲に非ざるが故に、云何が彼の空も亦相似なるや。」

答えて曰く。「取著を以ての故に。」

問うて曰く。「何れの法をか取著するや。」

答えて曰く。「色を取著し、空を取著するなり。若し取著有らば、云何が是の般若波羅蜜を得ん。此の取著は、豈に是れ見に非ざらんや。一切諸見、皆如來說きたもうに因るが故に斷ぜり。又復た何れの人か即ち彼の空を見とせん。彼の人復た何れの法を以てか對治となさん。唯だ二際無きのみ。是れ則ち能除なり。二際無きが故に名づけて非際と爲す。

以上のことからこの論（『順中論』）を著すのである。私は以上のように般若波羅蜜を知る。〔それは〕この〔般若波羅蜜の〕方便によってである。私が今、解釈するのが、所謂入中論門である。

その善男子・善女人は次のように述べる。「私は色が無常であることをはじめ、識が無常であり、苦であり、無我であるなどにいたるまでを知る。」この理由によりそれは似て非なる般若波羅蜜であって、真実の般若波羅蜜ではないのである。」

問。「色が空であり、無相であり、無願であると説くこの法がどうして相似であり、真実の般若波羅蜜ではないというのか。この三解脱とは世尊がお説きになったことである。有為ではないのだから、どうしてその空も似て非なるものなのか。」

答。「執着するからである。」

問。「どのような法に対して執着するというのか。」

答。「色に対して執着し、空に対して執着しているのである。もし執着があるならば、どうしてこの般若波羅蜜を得ることができるだろうか。そのような執着がどうして見解でないことがあろうか。あらゆる見解はみな、如来が空であるとお説きになったことによって、否定されているのである。また、いったい誰が如来のお説きになった空を見解とするだろうか。このような人はどのような法を〔見解に対する〕対治（pratipakṣa）とするだろうか。ただ“二つの極端が無い”ということのみが見解を除きうるものである。二つの極端が無いので“極端ではない”というのである。

是故如來已爲迦葉。如是說言。一切諸見。見空得出。若人取空。於空生見。我不能救。

以此義故。師說偈言。

空對一切見 是如來所說
於空生見者 彼則無對治

是の故に如來已に迦葉が爲に是くの如く説きて言く。「一切諸見、空を見とするをもて出ずるを得。若し人空を取さば空に於て見を生ず。我救う能わず。」

此の義を以っての故に、師、偈を説きて言く、

空は一切の見到對す
是れ如來の説きたもう所なり
空に於て見を生ざば
彼則ち對治無し^⑫

⑫ 13章 8 偈

[Skt p. 18]

śūnyatā sarvadr̥ṣṭīnāṃ proktā niḥsar-
aṇaṃ jinaiḥ.
yeṣāṃ tu śūnyatādr̥ṣṭis tān asādhyaṇ
babbhāṣire.

[Tib tsa 8a6-7]

rgyal ba rnams kyis stong pa nyid//
lta kun nges par 'byun bar gsung//
gang dag stong pa nyid lta ba//de dag
bsgrub tu med par gsungs//

[青目 18c16-17] 〈青目では 9 偈〉

大聖說空法 爲離諸見故
若復見有空 諸佛所不化

[清辯 91c24,28, 92a2]

如來說空法 爲出離諸見
諸有見空者 說彼不可治

[安慧 158c16-17]

遣有故說空 令出離諸見
若或見有空 諸佛所不化

このような理由から、如来はすでにマハーカーシャパ (Mahākāśyapa) に次のようにお説きになった。「あらゆる見解は空なるものを見解として得ることから出現してくる。もし空に執着するならば、空に対する見解を生ずることになる。このような者は、私には救いようがない」と。

このような理由から、師（ナーガールジュナ）は次のような偈頌を説いておられる。

空はあらゆる見解を対治するものである。

これは如来がお説きになったことである。

しかし空に対して何らかの見解を生ずるならば、

その者には対治がないことになる。

本論の筆受者曇林がまとめたとされる『二入四行論』でもこの偈頌が引用されているが、『二入四行論』では本論とは違った訳文になっている。諸佛説空法 為破諸見故 而復著於空 諸佛所不化（〔柳田1985〕 p. 58）

又復餘師名羅睺羅跋陀羅言。

一切見對治 如來說空是
不愛空不著 著空空亦物
不愛空不空 此二非不愛
無能壞佛語 佛語處處遍

又復た餘師にして羅睺羅跋陀羅と
名づくる言く。

一切見の對治は
如來空是れなりと説きたまえり
「空を愛さず著さず
空に著さば空も亦物なり
空と不空とを愛さず
此の二をば愛さざるにも非ず」
能く佛語を壞する無し
佛語處處に遍す

また、他の論師でラーフラバドラ^⑬という人は次のように説いておられる。

あらゆる見解の対治を、

如来は次のようにお説きになられた。

「この空に愛着せず、執着しない。

空に執着するならば空も存在する事物となってしまう。

空にも不空にも愛着せず、

この〔空と不空との〕二つに愛着しないのでもない。」

ブッダの言葉を破壊することはできない。

ブッダの言葉は余すところなく行き渡っている。

⑬ ラーフラバドラについては、ナーガールジュナとほぼ同時代であり、『般若波羅蜜多讃』、『法華讃』の作者と考えられている。[宇井1965]

又復經中佛說偈言

夫人不正見 少智故取空

如捉蛇不堅 如呪不善成

諸如是等。取著於色。取著色體。或分別空。分別不空。彼如是色。畢竟無物。

又復た經中に、佛、偈を説いて言
く、

夫れ人の正見せざるは

少智の故に空を取す

蛇を捉うるに堅ならざる如く

呪の善く成ぜざるが如し^⑭

諸の是の如き等の、色を取著し、
色體を取著し、或いは空を分別し、
不空を分別す。彼の是の如き色、畢
竟じて無物なり。

⑭ 24章11偈

[Skt p. 35]

vināśayati durdṛṣṭā śūnyatā man-
damedhasam.

sarpo yathā durgṛhīto vidyā vā
duṣprasādhitā.

[Tib tsa 15a2-3]

stong pa nyid la blta nyes na//shes rab
chung rnams phung bar 'gyur//
ji ltar sprul la gzung nyes dang//rig
sngags nyes par bsgrubs pa bzhin//

[青目 33a8-9]

不能正觀空 鈍根則自害
如不善呪術 不善捉毒蛇

[清辯 125b23-24]

少智愚癡者 以惡見壞空
如不善捉蛇 不如法持呪

[安慧 163c]

呪師法不成 不善攝蛇毒
惡見壞於空 其義亦如是

また、経典の中でブッダは次のような偈頌を説いておられる。

正しくものを見ることができない者は、

劣った智慧のため、空に執着する。

それは恰も蛇を上手く捉えていないようなものであり、

誤って呪術を用いるようなものである。

以上のように色に執着し、色の自体に執着する、或いは、空を分別し、不空を分別する。しかし、このような色は決して存在しない。

云何當有空與不空。又如彼色。一切諸法皆亦如是。如佛世尊如是說言。如不異色。別更有空。亦不 [40c] 異空。別更有色。如色於空。空於色義。亦復如是。如是等故。又復經中佛言。迦葉。若有何人。見法不空。如是之人。法亦是空。空亦是法。

又佛說言。所言空者。空自體空。所言色者。色自體空。若有少法而不空者。彼則有空。一切諸法皆無自體。何處當有空與不空。

云何が當に空と不空有るべきや。又、彼の色の如く、一切諸法は皆亦是の如し。佛世尊、是の如く説きて言うが如く、色に異らずして別に更に空有り、亦空に異らずして別に更に色有るが如く。空を色とし、色を空とするが如き義、亦復た是の如し。是の如き等の故に、又復た經中に佛言く。「迦葉、若し何れか人有りて、法不空なるを見れば、是の如きの人、法も亦是れ空なり。空も亦是れ法なり。」

又、佛説きて言く。「言う所の空とは、空の自體は空なり。言う所の色とは、色の自體は空なり。若し、少法有りて而も不空なれば、彼則ち空を有せん。一切諸法、皆自體無し。何處にか、當に空と不空有るべきや。」

どうして、空と不空とが存在することがあろうか。また、その色のように、あらゆる法も同様である。仏世尊も、次のように説いておられる。色とは異なるものとして、空が別に存在し、空と異なるものとして、別に色が存在する。空が色であり、色が空であるというような意味も、また同様である。

以上のように言われていることなどから、また、経の中でブッダがお説きになっている。「マハーカーシャパよ、もし、ある人が、法が不空であると見るのであれば、そのような人に対しては、法は空なるものであり、空なるものが法なのである。」

また、ブッダは次のようにもお説きになっている。「いま言われている空とは、空が自性として空であるという意味である。ここで言われている色も、色が自性として空であるという意味である。もし、わずかばかりでも不空なるものがあれば、それはつまり、空を実体的なものとして捉えることとなる。すべての法は、自性がないのである。どこに空と不空とがあるのか。」

依此義故。有偈說言

若法有不空 空亦得言有

無有法不空 依何法說空

我依此知。以取著故。相似義成。

問曰。若師如是。以此方便。解釋般若波羅蜜義。以何義故。先造中論。名爲造作。而非是經。

答曰。若人愚癡。非是點慧。彼人起心。如是分別。毀訾諸經。謂經不熟。唯論是實。餘法無論。

此の義に依るが故に偈有りて説きて言く、

若し、法にして不空有らば、空も亦有りと言うを得ん

法の不空有ること無くんば、何れの法に依りて空を説かん^⑮

我、是に依りて知る。取著を以ての故に、相似の義成ず。」

問うて曰く。「若し、師はの如く此の方便を以て般若波羅蜜の義を解釋せば、何の義を以ての故に、先に中論を造し、名づけて造作と爲して、而も是れ經に非ざるや。」

答えて曰く。「若し、人愚癡にして、是れ點慧に非ざれば、彼の人心を起こして、是の如く分別して、諸經を毀訾して、謂く「經、不熟にして唯論のみ是れ實なり。餘法に論なし。」

⑮ 13章 7 偈

[Skt p. 18]

yady aśūnyaṃ bhavet kiṃcid syāc
chūnyaṃ api kiṃcana.
na kiṃcid asty aśūnyaṃ ca kutah
śūnyaṃ bhaviṣyati.

[Tib. tsa 8a6].

gal te stong min cung zad yod//stong
pa cung zad yod par 'gyur//
mi stong cung zad yod min na//stong
pa yod par ga la 'gyur//

このことに基づいて〔『中論』〕偈で次のように説かれている。

もし、不空なる法があるならば、空はまたあると言えよう。しかし、
不空なる法があるのではない。どうして法が空であると言えようか。

このことによって、執着するから、「似て非なる」という意味が成立すると知る。」

問。「もし師（ナーガールジュナ）が、このように、この方便によって般若波羅蜜の意味を解釈しておられるのであれば、どうして先に『中論』をお造りになって、経ではなく、論となされたのであろうか。

答。「ある愚かで智慧を持たない人が考えを巡らせて経を分別し、経を軽んじて次のように言うであろう。「経は未熟なもので、ただ論のみが完全に熟したものである。論はそれ以外のものではない。」と。

[青目 18c7-8]

若有不空法 則應有空法
實無不空法 何得有空法

[清辯 91b9-10]

若一法不空 觀此故有空
無一不法空 何處空可得

[高麗版41 158c]

若有不空法 即應有空法
無少不空法 何得有其空

爲彼人故。此有偈言

伐煩惱怨盡 救有救惡道

如來有伐救 此二餘法無

此偈非唯直是根本。亦以讚歎供養如來。亦斷一切戲論。分別諸取著等故說此偈。

彼の人の爲の故に、この偈有りて言く。

煩惱の怨を伐し盡し 有を救し、
惡道を救す

如來に伐と救と有り 此の二は
餘法に無し^⑩

此の偈、唯だ直に是、根本のみに非ず。亦讚歎を以て如來を供養し、亦一切の戲論、分別、諸の取著等を斷つが故に、此の偈を說けり。

⑩ 以下とほぼ相当するが[§]、「如來」が「論」(śāstra)となっている。

[Poussin p. 3.3-4] (チベット訳欠)

yaḥ chāsti vaḥ^{*1} kleśaripūnaśeṣān
samtrāyate durgatito bhavāc ca.
taḥ chāsanāt trāṇaguṇāc^{*2} ca śāstraṃ
etaḥ dvayaṃ cānyamateṣu nāsti.

^{*1} ca. ^{*2} [trāṇa] guṇāc. (『中辺分別論釈疏』(*Madhyāntavibhaga-ṭīka*, Yamaguchi, S., ed., p. 3.9-12)

[北京版 No. 5534., *Dbus da mthar nam-par 'yed pa'i 'grel bzhad*, 20b8-21a1]

nyon mongs dgra rnam ma lus 'chos
pa dang//
ngan 'gro srid las skyob pa gang yin
pa//
chos skyob yon tan phyir na bstan bcos
te//
gnyis po 'di dag gzhan gyi lugs la
med//

[丹治1988] (p. 98) には、「*Prasannapada* のこの引用は後代の竄入と考えられる」と記されている。

このような人のためにこの偈があり、言うのである。

煩惱という怨敵を征服しつくし、迷いの生存を救い、悪道にある生存を救う。

如来は〔煩惱を〕調伏し、〔迷いから〕救済する、この二つは〔ブッダの教えより〕他にはない。

この偈は単に、直ちに〔経の〕根本を示しているだけではない。讃歎によって如来を供養する為に、また、一切の戲論と分別と諸々の執着などを断つために、この偈を説くのである。

問曰。云何。

答曰。有無量種供養如來。以如來有無量功德。今且略說三種供養。一者隨法順行供養。二者資材奉施供養。三者自身禮拜供養。此初隨法順行供養。供養中勝。以此偈法。供養如來。供養中勝。非物供養。

問曰。此說何人供養如來。

答曰。若人通達不生際者。又復有說言。須菩提於先禮我。論師如是。以此偈法供養如來。

問曰。供養世尊。第一上吉。是故論初。應法供養。謂此偈法。如說能斷一切取著。戲論等者。今應當說。

答曰。汝聽。我今〔41a〕爲說。善意思念。言戲論者。所謂取著有得有物二。及不實取諸相等。是戲弄法。故名戲論。彼今略說。所謂取體。若取非體。取體非體。或取非體非非體等。此偈於彼一切皆斷。

問うて曰く。「云何。」

答えて曰く。「無量の種有りて如來を供養す。如來に無量の功德有るを以てなり。今、且く三種の供養を略説す。一は隨法順行の供養なり。二は資材奉施の供養なり。三は自身禮拜の供養なり。此の初めの隨法順行の供養は、供養の中勝たり。此の偈の法を以て、如來を供養す。供養の中勝たるは、物の供養に非ず。」

問うて曰く。「此れ何れ人の如來を供養すと説くや。」

答えて曰く。「若し人、不生の際に通達せばなり。」

又復た説有りて言く。「須菩提、先に我を禮せよ。」論師は是の如く、此の偈の法を以て如來を供養す。」

問うて曰く。「世尊を供養するは、第一の上吉なり。是の故に論の初めに、應に法もて供養すべし。此の偈の法に謂う、能く一切の取著、戲論等を斷ずと説くが如きを、今當に説くべし。」

答えて曰く。「汝聽け。我今説爲に説かん。善く意に思念せよ。戲論と言うは、所謂取著にて有得、有物の二、及び不實に諸相を取る等なり。是れ戲弄の法なり。故に戲論と名づく。彼を今、略説す。所謂體を取す。若しは非體を取す。體にして非體なるを取す。或いは非體にして非非體なるを取す等なり。此の偈は彼に於て一切を皆斷ず。」

問。「どうしてか。」

答。「数限りない方法によって如来は供養される。何故なら如来には量りしれない功德があるからである。今はただ、要略して三種類の供養を説く。第一は、“随法順行の供養”である。第二は、“資材奉施の供養”である。第三は、“自身礼拝の供養”である。この最初の“随法順行の供養”は種々の供養の中で最も勝れたものであり、この偈の法に基づいて、如来を供養することである。供養の中で最も勝れたものは、資産の供養ではない。」

問。「ここではどの様な人が如来を供養すると説くのであるか。」

答。「不生という究極に精通した者である。」

このことはまた次のように説かれている。「スプーティ (Subhuti) よ、まず、我を礼拝せよ。」論師 (ナーガールジュナ) も同様に、この偈の法に従って供養なされたのである。」

問。「世尊を供養するのは第一のすぐれたよいことである。このような理由から、論 (『中論』) の初めにブッダの法に従って供養したのである。この偈の法、すなわち、一切の執着、戲論等を断つことができる、と説かれたものを、今まさに説くべきである。」

答。「聴きなさい。私が今から説明しよう。正しく思惟しなさい。戲論とは執着といわれるものであって、認識主体と認識対象という二つと、諸々の相をありのままに把握しないこと等である。これは虚構の法であるから戲論と名づけるのである。以上のことを今要略して説明する。たとえば、実体である (有) と捉え、非実体である (無) と捉え、実体でありかつ非実体である (有無) と捉え、実体でなくかつ非実体でもない (非有非無) と捉える等と説かれている。この偈はこれらすべてを否定している。」

補注

本論所引の『大般若波羅蜜經』が所謂『大品般若』であることは、既に中国三論宗の大成者、嘉祥大師吉蔵が『中論疏』の序文において次のように指摘している。「順中論は是れ天親の所作なり。順中論と言うは、広く大品等の經を引いて八不を証釈す。八不は則ち是れ中道なり。文に依って義を釈す、故に順中論と云う。」

(chT. 42. 1c 6-8) また、この引文が「法施品」に相当することは、[小沢1968] [八力1979] 等に既に指摘されている。今回の和訳に当たって、現行サンスクリットテキスト「法施品」との対照を行い、現代語訳に反映させた。

以下に少々長くなるが現行サンスクリットテキストの相当箇所と試訳を提示する(なおサンスクリットテキストは下線部がほぼ相当している)。

Kimura pp. 110, 21-115, 12.

Śakra āha: katamā sā Bhagavan prajñāpāramitā-prativarṇikā?

Bagavān āha: iha Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā imāṃ prajñāpāramitāṃ upadekṣyāma iti prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti. tatreyam prajñāpāramitā-prativarṇikā rūpaṃ anityaṃ ity upadekṣyanti. vedanā-saṃjñā-saṃskārā vijñānaṃ anityaṃ ity upadekṣyanti. evaṃ copadekṣyanti ya evaṃ ca carati sa carati prajñāpāramitāyāṃ iti. yeṣāṃ upadekṣyanti kulaputrāṇāṃ vā kuladuhitṛṇāṃ vā te rūpaṃ anityaṃ iti gaveṣiṣyanti. evaṃ vedanā-saṃjñā-saṃskārā vijñānaṃ anityaṃ iti gaveṣiṣyanti. te prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti. te prajñāpāramitā-prativarṇikāyāṃ carīṣyanti. te cakṣur anityaṃ ity upadekṣyanti. evaṃ śrotraṃ ghrāṇaṃ jihvā kāyo mano 'nityaṃ ity upadekṣyanti. rūpaṃ anityaṃ ity upadekṣyanti. evaṃ śabdā gandhā rasāḥ spraṣṭavyā dharmā anityā ity upadekṣyanti. pṛthividhātum anitya ity upadekṣyanti. abdhātum tejodhātum vāyudhātum ākāśadhātum vijñānadhātum anitya ity upadekṣyanti. cakṣurdhātum anitya ity upadekṣyanti. śrotradhātum ghrāṇadhātum jihvādhātum kāyadhātum manodhātum anitya ity upadekṣyanti. rūpadhātum anitya ity upadekṣyanti. śabdadhātum anitya ity upadekṣyanti. śabdadhātum anitya ity upadekṣyanti. gandhadhātum rasadhātum spraṣṭavyadhātum dharmadhātum anitya ity upadekṣyanti. cakṣurvijñānadhātum anitya ity upadekṣyanti. śrotravijñānadhātum ghrāṇavijñānadhātum jihvāvijñānadhātum kāyavijñānadhātum manovijñānadhātum anitya ity upadekṣyanti. cakṣuḥsaṃsparśadhātum anitya ity upadekṣyanti. śrotrasaṃsparśadhātum ghrāṇasaṃsparśadhātum jihvāsaṃsparśadhātum kāyasaṃsparśadhātum manāḥsaṃsparśadhātum anitya ity upadekṣyanti. cakṣuḥsaṃsparśapratyayā vedanā anityā ity upadekṣyanti. evaṃ śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāḥsaṃsparśapratyayā vedanā anityā ity upadekṣyanti. rūpaṃ duḥkham anityaṃ anātmety aśubhaṃ ity upadekṣyanti. vedanā-saṃjñā-saṃskārā vijñānaṃ duḥkham anityaṃ anātmety aśubhaṃ ity upadekṣyanti. pṛthividhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. abdhātum tejodhātum vāyudhātum

ākāśadhātum vijñānadhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. rūpa-śabda-gandha-rasa-sparsa-dharmā duḥkhā iti anātmāna ity aśubhā ity upadekṣyanti. cakṣur duḥkham ity anātmety aśubham ity upadekṣyanti. śrotram ghrāṇaṃ jihvā kāyo mano duḥkham ity anātmety aśubham ity upadekṣyanti. rūpadhātum śabdadhātum gandhadhātum rasadhātum spraṣṭavyadhātum dharmadhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. cakṣurdhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti, śrotradhātum ghrāṇadhātum jihvādhātum kāyadhātum manodhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. cakṣurvijñānadhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. śrotravijñānadhātum ghrāṇavijñānadhātum jihvāvijñānadhātum kāyavijñānadhātum manovijñānadhātum duḥkha ity anātmety aśubha ity upadekṣyanti. cakṣuḥsaṃsparśadhātum cakṣuḥsaṃsparśapratyayā vedanā duḥkhety anātmikety aśubhety upadekṣyanti. evaṃ śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manaḥsaṃsparśadhātum śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manaḥsaṃsparśapratyayā vedanā duḥkhety anātmety aśubhety upadekṣyanti. evaṃ te prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti. evaṃ dhyānapāramitā-prativarṇikām vīryapāramitā-prativarṇikām kṣāntipāramitā-prativarṇikām śīlapāramitā-prativarṇikām dānapāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti. evaṃ rūpaṃ vedanā-saṃjñā-saṃskārā vijñānam anityaṃ duḥkham anātmā 'śubham ity upadekṣyanti. yāvac cakṣu rūpaṃ cakṣurvijñānadhātum anityo duḥkho 'nātmā 'śubha ity upadekṣyanti. evaṃ yāvac chrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manovijñānadhātum anityo duḥkho 'nātmā 'śubha ity upadekṣyanti. evaṃ prajñāpāramitā antyā duḥkhā 'nātmā 'śubhety upadekṣyanti. evaṃ dhyānapāramitā vīryapāramitā kṣāntipāramitā śīlapāramitā dānapāramitā anityā duḥkhā 'nātmā 'śubhety upadekṣyanti. evaṃ apramāṇa-dhyānārūpyasamāpattīr anityā duḥkhā 'nātmāno 'śubhā ity upadekṣyanti, prajñāpāramitāyāṃ carantaḥ. evaṃ upadekṣyanti smrṭyupasthānāny anityāni duḥkhāny anātmāny aśubhānīty upadekṣyanti. evaṃ samyakprahāṇārdhipādendriya-bala-bodhyaṅga-mārgān anityā duḥkhā anātmāno 'śubhā ity upadekṣyanti prajñāpāramitāyāṃ caranto yāvat sarv'ākārajñatām anityā duḥkhā 'nātmā 'śubhety upadekṣyanti. evaṃ ca vakṣyanti ya evaṃ carati sa prajñāpāramitāyāṃ caratīti, iyaṃ Kauśika prajñāpāramitā-prativarṇikā.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā prajñāpāramitām upa-
 diśanta evaṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitāṃ bhāvaya sa
 tvaṃ prajñāpāramitāṃ bhāvayamāṇaḥ prathamāyāṃ bhūmau sthāsyasi yāvad
 daśamyāṃ bhūmau sthāsyasi. evaṃ dhyānapāramitāṃ vīryapāramitāṃ
 kṣāntipāramitāṃ śīlapāramitāṃ dānapāramitāṃ bhāvayamāṇaḥ prathamāyāṃ
 bhūmau sthāsyasi yāvad daśamyāṃ bhūmau sthāsyasi. tac ca nimittayogenopa-
lambhayogena sarv'ākārasaṃjñāyā prajñāpāramitāṃ bhāvayiṣyati, iyaṃ sā
Kauśika prajñāpāramitā-prativarṇikā.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā evaṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitāṃ bhāvaya sa tvaṃ prajñāpāramitāṃ bhāvayamāṇaḥ śrāvakabhūmiṃ samatikramiṣyasi, pratyekabuddhabhūmiṃ samatikramiṣyasi, iyaṃ sā Kauśika prajñāpāramitā-prativarṇikā.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ mahāyānikānāṃ kulaputrāṇāṃ vā kuladuhitṛṇāṃ vā prajñāpāramitāṃ upadiśanta evaṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitāṃ bhāvaya sa tvaṃ prajñāpāramitāṃ bhāvayamāno bodhisattva-niyāmaṃ avakramiṣyasi, iyaṃ sā Kauśika prajñāpāramitā-prativarṇikā.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā prajñāpāramitāṃ upadiśamānā evaṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitāṃ bhāvaya sa tvaṃ prajñāpāramitāṃ bhāvayamāno 'nutpattika-dharma-kṣāntiṃ pratilapsyase sa tvaṃ anutpattika-dharma-kṣāntiṃ pratilabhya bodhisattvābhijñāsu sthāsyasi sa tvaṃ abhijñāsu sthitvā buddhakṣetreṇa buddhakṣetraṃ saṃkramiṣyasi buddhānāṃ bhagavatāṃ satkaraṇāya gurukaraṇāya mānanāya pūjanāyārcanāyāpacāyanāya, evaṃ upadekṣyanti. evaṃ upadiśamānāḥ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ bodhisattvayānikānāṃ kulaputrāṇāṃ vā kuladuhitṛṇāṃ vā evaṃ upadekṣyanti, yaḥ kulaputraḥ prajñāpāramitāṃ udgrhīṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati paryavāpsyati yoniśo manasikariṣyati so 'saṃkhyeyam aprameyam aparimāṇaṃ puṇyaskandhaṃ prasaviṣyati. evaṃ copadiśamānāḥ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti.

punar aparaṃ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ bodhisattvayānikānāṃ kulaputrāṇāṃ kuladuhitṛṇāṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra atītānāgata-pratyutpannānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksambuddhānāṃ yat kuśalamūlaṃ prathamacittotpādam upādāya yāvad anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau parinirvṛtānāṃ tat sarvaṃ anumodya ekataḥ piṇḍikṛtyānuttarāyāi samyaksambodhaye pariṇāmayā. evaṃ upadiśamānāḥ Kauśika te kulaputra vā kuladuhitaro vā prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti.

Śakra āha: katham upadiśantas te kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ bodhisattvayāna-samprasthitānāṃ kulaputrāṇāṃ vā kuladuhitṛṇāṃ vā na prajñāpāramitā-prativarṇikāṃ upadekṣyanti?

Bhagavān āha: iha Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ bodhisattvayāna-samprasthitānāṃ kulaputrāṇāṃ kuladuhitṛṇāṃ vā prajñāpāramitāṃ upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitāṃ bhāvayamāno rūpaṃ anityato mā drākṣīs. tat kasya hetoḥ? rūpaṃ rūpasvabhāvena śūnyaṃ, yaś ca rūpasvabhāvaḥ so 'bhāvo, yaś cābhāvaḥ sā prajñāpāramitā, yā prajñāpāramitā tatra rūpaṃ na nityaṃ iti vā anityaṃ iti vā

vyapadiśyate. tat kasya hetoḥ? tathā hi rūpam eva tatra na saṃvidyate. kuto nityam vā anityam vā bhaviṣyati? evaṃ copadiśantas te Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā na prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti. evaṃ vedanā-saṃjñā-saṃskārā vijñānam anityato mā drākṣīs. tat kasya hetor? vijñānam vijñānasvabhāvena śūnyam, yaś ca vijñānasvabhāvaḥ so 'bhāvo, yaś cābhāvaḥ sā prajñāpāramitā, yā prajñāpāramitā tatra vijñānam na nityam iti vā anityam iti vā vyapadiśyate. tat kasya hetos? tathā hi vijñānam eva tatra na saṃvidyate. kuto nityam vā anityam vā bhaviṣyati? evaṃ upadiśantas te Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā na prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti. evaṃ vyastasa-masteṣu skandha-dhātva-āyatana-pratītyasamutpādāṅgeṣu sarvapāramitāsu sarvaśūnyatāsu sarvasamādhīṣu sarvadhāraṇīmukheṣu saptatrimśad-bodhipakṣyeṣu dharmeṣu satyeṣv aṣṭa-vimokṣeṣu navānupūrvavahārasamāpattiṣv apramāṇa-dhyān'ārūpyasamāpattiṣu śūnyatānimittapraṇihiteṣu ṣaṭsv abhijñāsu daśasu tathāgatabaleṣu caturṣu vaiśāradyeṣu catasṣu pratisaṃvitsv aṣṭādaśasv āveṇikeṣu buddhadharmeṣu kartavyam. ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitām bhāvaya mā ca tvaṃ kulaputra sarvajñatām anityato drākṣīs. tat kasya hetos? tathā hi sarvajñatā sarvajñatāsvabhāvena śūnyā, yaś ca sarvajñatāyāḥ svabhāvaḥ so 'bhāvo, yo 'bhāvaḥ sā prajñāpāramitā, yā prajñāpāramitā na tatra sarvajñatāyā nityatā vā anityatā vā vyapadiśyate. tat kasya hetos? tathā hi sarvajñataiva na saṃvidyate. kutaḥ punar nityatā vā anityatā vā bhaviṣyati? evaṃ copadiśantaḥ Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā na prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti.

punar aparaṃ Kauśika kulaputrā vā kuladuhitaro vā teṣāṃ mahāyānikānāṃ kulaputrāṇāṃ vā kuladuhitrāṇāṃ vā evaṃ na prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti, ehi tvaṃ kulaputra prajñāpāramitām bhāvaya mā ca tvaṃ kaṃcid dharmam drākṣīḥ, mā ca kasmincid dharme sthāḥ. tat kasya hetos? tathā hi prajñāpāramitāyāṃ na sa dharmāḥ saṃvidyate yo dharmo draṣṭavyo yatra vā pratiṣṭhātavyaḥ. tat kasya hetos? tathā hi Kauśika sarvadharmā svabhāvena śūnyāḥ, yaś ca dharmāḥ svabhāvena śūnyaḥ so 'bhāvo, yaś cābhāvaḥ sā prajñāpāramitā, yā prajñāpāramitā sā na kasyacid dharmasyāyūhalaṃ vā niryūhalaṃ vā utpādo vā nirodho vā ucchedo vā śāśvato vā ekārthatā vā nānārthatā vā āgamo vā nirgamo vā. evaṃ upadiśantaḥ Kauśika te kulaputrā vā kuladuhitaro vā na prajñāpāramitā-prativarṇikām upadekṣyanti. tasmāt tarhi Kauśika kulaputreṇa vā kuladuhitrā vā evaṃ prajñāpāramitāyā artho vyapadeṣṭavyaḥ. evaṃ upadiśan kulaputro vā kuladuhitā vā bahutaraṃ puṇyaṃ prasaviṣyati. na tv eva te pūrvakāḥ kulaputrāḥ kuladuhitaraś ca.

シャクラは次のように申し上げた、「世尊よ、何が似て非なる般若波羅蜜 (prajñāpāramitā-prativarṇikā) でしょうか」と。

世尊は次のように仰せられた。「カウシカよ、この世間において諸々の善男子・

善女人は『般若波羅蜜を私は説こう』と、この似て非なる般若波羅蜜を説くであろう (upadekṣyanti)。その時『色は無常である』と、この似て非なる般若波羅蜜を彼等は説くであろう。『受・想・行・識は無常である』と彼等は『この似て非なる般若波羅蜜を』説くであろう。』

また同様に、『このように行ずる者は般若波羅蜜を行ずるのである』と彼等は『この似て非なる般若波羅蜜を』説くであろう。何であれ、諸々の善男子・善女子が『この似て非なる般若波羅蜜を』を説くところにおいて、『色は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』推求するであろう (gaveṣiṣyanti) 同様に、『受・想・行・識は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』推求するであろう。

彼等は似て非なる般若波羅蜜を説くであろう。彼等は似て非なる般若波羅蜜を行ずるであろう (carīṣyanti)。

『眼は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。同様に、『耳・鼻・舌・身・意は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『色は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。同様に、『声・香・味・触・法は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『地界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『水界・火界・風界・虚空界・識界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『眼界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『耳界・鼻界・舌界・身界・意界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『色は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『声界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『香界・味界・触界・法界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『眼識界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『眼触界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『耳触界・鼻触界・舌触界・身触界・意触界は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『眼触界を縁とする受は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『耳触・鼻触・舌触・身触・意触を縁とする受は無常である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『色は苦であり、無常であり、無我であり、不浄 (aśubha) である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『受・想・行・識は苦であり、無常であり、無我であり、不浄である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『地界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。『水界・火界・風界・虚空界・識界は苦であり、無常であり、無我であり、不浄である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『色・声・香・味・触・法は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は『般若波羅蜜を』説くであろう。

『眼は苦であり、無常であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。『耳・鼻・舌・身・意は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

『色界・声界・香界・味界・触界・法界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

『眼界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。『耳界・鼻界・舌界・身界・意界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

『眼識界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。『耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

『眼識界、眼触界を縁とする受は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。同様に『耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界、耳触・鼻触・舌触・身触・意触を縁とする受は苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。このように、彼等は似て非なる般若波羅蜜を説くであろう。

同様に、似て非なる静慮波羅蜜・精進波羅蜜・忍辱波羅蜜・持戒波羅蜜・布施波羅蜜を彼等は説くであろう。

同様に、『色・受・想・行・識は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

『眼・色、眼識界に至るまで無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。同様に『耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界に至るまで無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

同様に、『般若波羅蜜は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。同様に『静慮波羅蜜・精進波羅蜜・忍辱波羅蜜・持戒波羅蜜・布施波羅蜜は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

同様に、『〔四〕無量〔心〕・〔四〕禪・〔四〕無色定は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と般若波羅蜜を現に行じている彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

同様に、『〔四〕念処は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と〔般若波羅蜜を現に行じている〕彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

同様に、『〔四〕正勤・〔四〕神足・〔五〕根・〔五〕力・〔三十七〕菩提分道は無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と般若波羅蜜を現に行じている彼等は〔般若波羅蜜を〕説くであろうし、一切相智性(sarvakārajñatā)に至るまで『無常であり、苦であり、無我であり、不浄である』と〔般若波羅蜜を〕説くであろう。

同様に、『誰であれ、このように行ずる者は般若波羅蜜を行ずるのである』と彼

等は言うであろう (vakṣyanti)。[しかしながら] カウシカよ、般若波羅蜜を現に説いているその諸々の善男子、善女人は次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。般若波羅蜜を修習し、般若波羅蜜を現に修習している汝は、初地に住し、及び十地に至るまで住するであろう。同様に静慮波羅蜜・精進波羅蜜・忍辱波羅蜜・持戒波羅蜜・布施波羅蜜を現に修習している汝は、初地に住し、及び十地に至るまで住するであろう』と。しかしながら、彼等は相をもって (nimittayogena)、取得をもって (upalambhayogena)、一切の形相に対する想をもって (sarvākārasamjñayā) 般若波羅蜜を修習するであろう (bhāvayiṣyati)。カウシカよ、これは似て非なる般若波羅蜜である。

さらにまた、カウシカよ、その諸々の善男子・善女人は次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。般若波羅蜜を修習し、般若波羅蜜を現に修習している汝は、声聞地を越えるであろう。独覺地を越えるであろう』と。しかしながら、カウシカよ、これは似て非なる般若波羅蜜である。

さらにまた、カウシカよ、般若波羅蜜を現に説いているその諸々の善男子・善女人は、大乘を求める (mahāyānika) その諸々の善男子・善女人の為に次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち、『来たれ、汝善男子よ。般若波羅蜜を修習し、般若波羅蜜を現に修習している汝は、菩薩の位に入るであろう』と。しかしながら、カウシカよ、これは似て非なる般若波羅蜜である。

さらにまた、カウシカよ、般若波羅蜜を現に説いているその諸々の善男子・善女人は次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。般若波羅蜜を修習し、般若波羅蜜を現に修習している汝は、無生法忍を得るであろう。すでに無生法忍を得おわって、汝は菩薩の神通に住するであろう。すでに菩薩の神通に住しおわって、汝は諸々の仏・世尊を恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、崇拜し、尊崇する為に、一仏国より一仏国に至るであろう』と。このように彼等は「般若波羅蜜を」説くであろう。カウシカよ、現に「般若波羅蜜を」説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くであろう。

さらにまた、カウシカよ、般若波羅蜜を現に説いている諸々の善男子・善女人は、菩薩乗を求める (bodhisattvayānika) その諸々の善男子・善女人の為に次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち『般若波羅蜜を受持し、憶持し、読誦し、学習し、正しく憶念する善男子は、無量・無数・無限の功德聚を得るであろう』と。しかしながら、カウシカよ、現に「般若波羅蜜を」説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くであろう。

さらにまた、カウシカよ、般若波羅蜜を現に説いているその諸々の善男子・善女人は、菩薩乗を求めるその諸々の善男子・善女人の為に次のように「般若波羅蜜を」説くであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。初発心より無余依涅槃界において般涅槃するに至るまでの過去・未来・現在の諸々の如来・阿羅漢・正等覺者のすべての善根に随喜し、一向に専念して無上なる正等覺に回向せよ』と。カウシカよ、現に「般若波羅蜜を」説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くであろう。』

シャクラは次のように申し上げた。「〔似て非なる般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、菩薩乗を求める (bodhisattvayāna-samprasthitānām) その諸々の善男子・善女人の為に、如何にして似て非なる般若波羅蜜を説くことがない (na prajñāramitā-pratīvarṇikām upadekṣyanti) でしょうか」と。

世尊は次のように仰せられた。「カウシカよ、この世間において諸々の善男子・善女人は、菩薩乗を求めるその諸々の善男子・善女人の為に、般若波羅蜜を次のように説くであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。般若波羅蜜を現に修習している汝は、『色は無常である』と観てはならない。(mā drākṣīs)。それはどうしてか。色は色の自性 (svabhāva) として空 (śūnya) である。また、何であれ色の自性なるもの、それは存在しない (abhāva)。そして、何であれ〔自性として〕存在しないもの、それが般若波羅蜜である。何であれ、般若波羅蜜なるもの、そこにおいて『色は常ではない』あるいは『色は無常である』と表現されるのである (vyapadiśyate)。それはどうしてか。何故なら、他ならぬ色がそこで得られないからである。(na samvidyate)。どうして〔色の〕常や無常があろうか (bhaviṣyati)』と。従って、カウシカよ、〔般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くことがないであろう。同様に、受・想・行・識を、無常であると観てはならない。それはどうしてか。何であれ識の自性なるもの、それは存在しない。そして、何であれ〔自性として〕存在しないもの、それが般若波羅蜜である。何であれ般若波羅蜜なるもの、そこにおいて『識は常ではない』あるいは『識は無常である』と表現されるのである。それはどうしてか。何故なら、他ならぬ識がそこで得られないからである。どうして〔識の〕常や無常があろうか』と。カウシカよ、〔般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くことがないであろう。〔五〕蘊・〔十八〕界・〔十二〕処・縁起の支分 (pratītyasamutpādaṅga)、一切の波羅蜜、一切の空性、一切の三昧、一切の陀羅尼門、三十七菩提分法、〔四〕諦、八解脫、九次第住等持、〔四〕無量〔心〕・〔四〕禪・〔四〕無色定、空無相無願、六神通、如來の十力、四無〔所〕畏、〔四〕無疑解、十八不共仏法の部分と全体について同様に為されるべきである。すなわち『来たれ、汝善男子よ。すでに般若波羅蜜を修習しおわって、汝善男子よ、一切智性 (sarvajñatā) を無常であると観てはならない。それはどうしてか。何故なら、一切智性は一切智性の自性として空である。また、何であれ一切智性の自性なるもの、それは存在しない。そして、何であれ〔自性として〕存在しないもの、それが般若波羅蜜である。何であれ般若波羅蜜なるもの、そこにおいて『一切智性は常ではない』あるいは『一切智性は無常である』と表現されるのである。それはどうしてか。何故なら、他ならぬ一切智性がそこで得られないからである。どうして〔一切智性の〕常や無常があろうか』と。従って、カウシカよ、〔般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くことがないであろう。

さらにまた、カウシカよ、諸々の善男子・善女人は、大乘を求めるその諸々の善男子・善女人の為に、次のように似て非なる般若波羅蜜を説くことがないであろう。すなわち『来たれ、汝善男子よ。すでに般若波羅蜜を修習しおわって、汝はどのような法 (dharma) も観てはならない。またどのような法にも住してはならない (mā sthāḥ)。それはどうしてか。何故なら、何であれ観られるべき、あるいは、そこに住すべき (pratiṣṭhātavyaḥ) その法が般若波羅蜜の中に存在しないからである。それはどうしてか。何故なら、一切法は自性として空である。また、何であれ自性として空である法、それは存在しない。そして、何であれ〔自性として〕存在しないもの、それが般若波羅蜜である。何であれ般若波羅蜜なるもの、それはいかなる法についても、決して保つべき (āyūḥ) でなく、決して捨てるべき (niryūḥ) でなく、生ずること (utpāda) なく、滅すること (nirodha) なく、断 (uccheda) でなく、常 (śāśvata) でなく、一義 (ekārthatā) でなく、異義 (nānārthatā) でなく、来ること (āgama) なく、去ること (nirgama) がないからである』と。カウシカよ、〔般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、このように似て非なる般若波羅蜜を説くことがないであろう。それ故、カウシカよ、実に善男子・善女人によって、このように般若波羅蜜の義 (artha) が表現されなければならない (vyapadeṣṭavyaḥ)。このように〔般若波羅蜜を〕現に説いているその諸々の善男子・善女人は、さらに多くの功德 (puṇya) を得るであろう。しかし、先の〔似て非なる般若波羅蜜を解説する〕その諸々の善男子・善女人は〔さらに多くの福德を得ることは〕ないのである。』

1 文献

- ChT 高楠順次郎・渡邊海旭 監修 小野玄妙 編『大正新修大蔵経』大蔵出版、東京、1924-1932.
- Poussin Poussin, Luis de la Vallée, ed., *Mūlamadhyamakakārikas (Madhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapāda Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St-Petersburg, 1903-1913.
- Skt Jong, J.W. de., ed., *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, The Adyar Library and Research Centre, Madras, 1997.
- Tib No. 3824, *dbu ma rtsa ba'i tshig le 'yur byas pa shes rab ces bya ba*, 『デルゲ版チベット大蔵経』論疏部 中観部 1 (東京大学文学部所蔵), 編集 東京大学文学部印度哲学印度文学研究室, 発行 株式会社世界聖典刊行協会, 東京, 1997.
- Kimura 『PAÑCAVIMŚATISĀHASRIKĀ PRJÑĀPĀRAMITĀ II III』ed. by Takayasu Kimura, SANKIBO Busshorin Publishing, 1986.
- 安慧 No. 1567, 安慧菩薩像 惟淨等譯『大乘中観釋論』, 高楠順次郎・渡邊海旭 監修 小野玄妙 編『大正新修大蔵経』(第30卷), 大蔵出版, 東京, 1927.
- 清辯 No. 1566, 偈本龍樹菩薩 釋論分別明菩薩 波羅頗蜜多羅什譯『般若燈論

- 釋』，同『大正新修大藏經』所収。
- 青目 No. 1564，龍樹菩薩造 梵志青目釋『中論』，同『大正新修大藏經』所収。
- 高麗版 『高麗大藏經』 Vol. 41 大乘中觀釋論外20部，東國大学校出版部，1977。
- 宇井1965 宇井伯寿『印度哲学研究』第一，岩波書店。
- 小沢1968 小沢憲珠「順中論について」『印度学仏教学研究』16-2。
- 小沢1970 「順中論における我の解釈」『印度学仏教学研究』18-2。
- 梶山1984 梶山雄一「仏教知識論の形成」『講座・大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社。
- 片岡1959 片岡融悟「無著の順中論について」『真宗研究』4。
- 川崎1992 川崎信定『一切智思想の研究』春秋社。
- 諏訪1988 諏訪義純『中国中世仏教史研究』大東出版社。
- 玉置1925 玉置韜晃「順中論議入大般若波羅蜜多初品法門に就て」『禅学研究』1。
- 丹治1988 丹治昭義『中論釈 明らかなことはI』関西大学出版部。
- 中田1977 中田直道「『順中論』にあらわれる因の三相」『玉城康四郎博士還暦記念論集・仏の研究』春秋社。
- 宮崎1988 宮崎市定「九品官人法の研究」『宮崎市定全集6』岩波書店。
- 八力1979 八力広喜「『順中論』考」『北海道武蔵女子短期大学紀要』11。
- 柳田1985 柳田聖山『禅の語録1 達摩の語録』筑摩書房。
- 渡邊1986 渡邊章悟「八不と縁起—「般若経」における「八不偈」をめぐる—」『東洋大学大学院紀要』23。